

COMPACT
disc
DIGITAL AUDIO
DOCD-0005

CAMILLE SAINT-SAËNS
THE SWAN
SALUT D'AMOUR / AFTER A DREAM
KOH IWASAKI
Popular Pieces For 'Cello



DAM



C. SAINT-SAËNS

THE SWAN

SALUT D'AMOUR / AFTER A DREAM

KOH IWASAKI Popular Pieces For 'Cello

岩崎 洸 チェロ名曲集 (チェロ) 岩崎 洸 (ピアノ) 岩崎 淑

T.NO.

- 1** 白鳥 (サン＝サーンス) 2' 46"
THE SWAN (C. Saint-Saëns)
- 2** 愛の挨拶 (エルガー) 2' 44"
SALUT D'AMOUR (Edward Elgar)
- 3** ト調のメヌエット (ベートーヴェン) 2' 33"
MENUET (No. 2 in G) (L. van Beethoven)
- 4** ミンストレル (ドビュッシー) 2' 43"
MINSTRELS (Claude Debussy)
- 5** 夢のあとに (フォーレ) 2' 50"
AFTER A DREAM (Gabriel Faure)
- 6** 泉のほとりで (ダヴィドフ) 3' 54"
AT THE FOUNTAIN (Carl Davidoff)
- 7** ゆるやかなパラフレーズ (藤井大史) 5' 13"
THE MILDLY PARAPHRASE (Daishi Fujii)
- 8** メロディー (チャイコフスキー) 3' 39"
MELODIE (P. I. Tchaikovsky)
- 9** アダージョ (バッハ) 4' 06"
ADAGIO (J. S. Bach)

- 10 プレリユード(無伴奏組曲第1番より) (バッハ) 2' 28"
PRELUDE(from Suite I)(J.S.Bach)
- 11 ブーレ I & II (無伴奏組曲第3番より) (バッハ) 4' 10"
BOURRÉE I & II (from Suite III)(J.S.Bach)
- 12 アレグロ(協奏曲二長調より) (ヴィヴァルディ) 2' 22"
ALLEGRO(from Concerto in D majeur)(Antonio Vivaldi)
- 13 エレジー (フォーレ) 6' 10"
ELEGIE(Gabriel Faure)
- 14 ブーレ (スクワイヤー) 2' 47"
BOURRÉE(W.H.Squire)
- 15 無言歌 (メンデルスゾーン) 4' 00"
SONG WITHOUT WORDS(F.Mendelssohn)
- 16 ヴィトー (ポッパー) 3' 53"
VITO(David Popper)
- 17 火祭りの踊り (ファリャ) 3' 24"
DANSE RITUELLE DU FEU(M.De Falla)
- 18 鳥の歌 (カザルス) 3' 17"
SONG OF THE BIRDS(Pablo Casals)



制作にあたって

日頃は第一家庭電器をご愛顧賜わり、又この度は「VIPメイト会員」を継続いただき、誠にありがとうございます。

当社のオーディオ会員システムは、ベーシックな「テープ・メイト会員」、その発展タイプの「テープ・メイト特別会員」、そしてコンポーネントを中心にビジュアルを加えた「VIPメイト」の3種類ですが、今春は、その「テープ・メイト」が10周年を迎えることができました。これも偏に会員の皆様の変わらぬご支援の賜と、心から感謝申し上げます。

「VIPメイトは、コンポーネントを中心とした当社オーディオ最高位の会員システム「VIPメンバーズ」として8年前にスタートし、その後、「VIPメイト」への変更を経て、昨年、CD・LD・VHD・ソフト専門店「AVソフトピア」の開店を機に、ニューメディアを含めた新会員システムとしてフレッシュ・アップさせていただきました。そして今回から、従来の愛蔵家No.1入スーパー・アナログ・ディスク「VIP45」に加えて、デジタル録音による「VIP・CD」も制作し会員の皆様にいずれか好きな方を選んでいただくことになりました。

初の「VIP・CD」を記念して日本を代表するチェリスト・岩崎洗氏と、ピアノ伴奏の第一人者として世界的なソリストとの共演を重ねてきた岩崎淑さん御姉弟の演奏で、チェロ名曲集「岩崎洗◎白鳥・愛の挨拶・夢のあとに」を東芝EMI㈱と共同制作いたしました。岩崎洗さんは、16歳で第29回音楽コンクール（昭和35年）で第1位・特賞を得て以来、チャイコフスキー国際コンクール第3位（昭和45年）入賞等、欧米を中心に活躍されています。

収録された18曲は、タイトル曲のように大変良く知られた珠玉の名曲や、チェロの高度な演奏テクニックを必要とするもの、更には藤井大史の曲のように世界初録音を含むなど、大変バラエティに富んだ内容で、音楽のお好きな方ならどなたにでも楽しんでいただけたと思います。

録音は新年早々の1月8日、9日の両日、水道橋のバリオ・ホールで、DAMとしては初めての、CD企画専用デジタル録音を行いました。このホールは、世界的に有名な作曲家・指揮者であるビエール・ブーレーズ氏が名誉館長をつとめるアビラック・ミュージック・コミュニティ・センターの中核で、残響を1～2秒コントロールできる等の最新設備を誇っております。

LP2枚分に近い曲数を2日間で録音するという

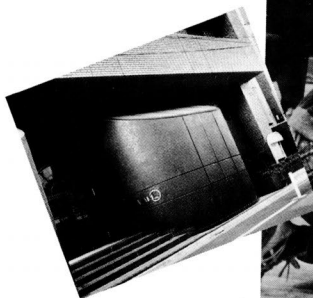
ハードなスケジュールでしたが、岩崎洸・淑さんの気さくなお人柄による暖かい雰囲気の中で精神的にレコーディングが進められました。

岩崎洸氏の愛器ストラディヴァリの豊かな低域からヴァイオリンを思わせる高域まで、美しくかつスケールの大きなチェロの魅力を、このVIP・CDでお楽しみいただけると思います。

今後、VIPメイト会員の皆様により良い音楽ソフトをお届けするべく更に一層の努力をする所存ですので、今後ともご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

なお、本CD制作にあたって、岩崎洸・淑さん、東芝EMI株及びスタッフ各位に多大なご協力をいただきましたことを心からお礼申し上げます。

DAM推進委員会





十年一昔というが、岩崎淑、洸の姉弟との付き合いを考えると、10年どころか、15年余り前のことが、まるで昨日のことのように思い出されることがある。

姉弟に初めてインタビューしたのは、昭和45年、大阪で万国博が開かれた年の秋だった。あのときのことは、今でもハッキリ覚えている。彼等の家は、そのころ東京・大田区の千束にあった。ピアノが置いてある、あまり広くない部屋で、二人はなんとなく照れくさそうにして待っていた。彼等と知り合ったのは、その少し前だった。

洸君は長髪で、「面倒くさくて刈らないでいるうちに伸びちゃったんですよ。ニューヨークの街を歩いていたら、アメリカ人の子供に、あっジャパニーズ・ビートルズだ！なんて言われたりしてね」といった話も出た。二人はその数日後、東京

文化会館でリサイタルを開くことになっていて、曲目のなかから少しひいて聴かせてくれたりした。

洸君は豪放なようでいて、細やかなところがあり、淑さんはニコニコと当たりがいいが、芯の強さを感じさせるところがあった。この感じは、今も変わらない。

私はあのとき、この二人に、音楽ジャーナリストとしての関心以上の何かを感じた。そしてそれが、今日に続く交流のきっかけになった。

あれから15年余、淑さんと洸君の演奏を聴かなかった年はほとんどない。二人が始めた沖縄のムーンビーチ・ミュージック・キャンプも、去年の12月で7年目を迎えたが、この楽しく実り多い室内楽のキャンプにも、既に5回参加している。

音楽ジャーナリストというのは、好きな音楽家に出会っても、彼等とある距離を保ち、どこか醒めていなければならないと、私は思っている。しかし、恋をしながら醒めているのが不可能なように、それが極めて難しくなることがある。

実は今、このレコードのための録音のカセットを聴きながら、この原稿を書いている。まだレコードとして完全に仕上がった状態ではないものだが、確かな手応えにホッと、くつろいで楽しむ段階に入っている。

国際的に活躍している二人の演奏について、「ホッと」などというのは失礼かもしれないが、ジ

ヤーナリストの冷たさを忘れて、彼等の側に立ってしまっている、私の心情でもある。

私の気持ちが、あまりエスカレートしてしまわないうちに、岩崎姉弟の演奏を初めて聴かれる方のために、二人の経歴を簡単に紹介しておこう。去年のムーンビーチ・ミュージック・キャンプ・アンド・フェスティバルのプログラムに書かれているものが、コンパクトにまとまっているので、以下に引用させていただこう。

岩崎 洸 第29回音楽コンクール第1位、特賞。桐朋学園高校を経てジュリアード音楽院へ留学。チャイコフスキー、ウィーン、ミュンヘン、ブダペスト、カサド等の多くの国際コンクール上位入賞。1970年の日本デビュー以来ソロ、室内楽、オーケストラとの協演、またレコーディングを行い、芸術大賞を受賞。ロッケンハウス音楽祭、アスペン音楽祭、クフモ音楽祭に参加。1985年秋には、姉淑と共に国際文化交流基金の派遣により、東欧6カ国の演奏旅行を行った。現在、アメリカ、イリノイ州立大学教授を務める。

岩崎 淑 桐朋学園、米国ジュリアード音楽院、イタリア キジ音楽院にて学ぶ。ミュンヘン、ブダペスト、チャイコフスキーコンクールなどで賞を受け、現在、日本における貴重な室内楽ピアニスト。1976年以来、ミュージック・イン・スタイルを主宰。1979年より、沖縄ムーンビーチ・ミュージック・キャンプを企画開催。好評を受く。内外

の著名な演奏家と共演し、レコーディングは33枚にのぼる。現在、桐朋学園大学で伴奏法、室内楽を教えている。最近ではアンドレ・ナヴァラ、イヴリー・ギトリス、ローラ・ボベスコと共演。

再びレコードの話に戻ろう。洸君のチェロが、伸びやかに、深々と鳴っている。ひいているのは、ストラディヴァリウスの名器である。日本でデビューしたころ、彼が使っていたのは、ベンタバーネ。ニューヨークに留学中に同地のオーケストラと協演したとき、彼の演奏に感激した二人のファンが贈ってくれたものだった。

淑さんのピアノが、実にデリケートな味わいを出す。芯がしっかりしているから、サロン音楽ふうに流れることは、決してない。しかも、小品を心から楽しむ余裕がある。

こんな二人の演奏を聴いていると、彼等がアメリカで演奏会を開いたときの、ニューヨーク・タイムズ紙の批評を思い出す。

「彼等の演奏は、四手でひきながら、一つの心でひかれた音楽であった」

以前、二人は、外国に居ると、夫婦だと思われる、姉弟だと言うと「双子か？」と聞かれたりしたものだった。

洸君は、既に故人になった名チェリスト、というよりも大音楽家のパブロ・カザルスから、数週

間、手ほどきを受けたことがある。そのときのカザルスの印象について、あるときこう語った。

「もう90歳を過ぎていているというのに、いつも夢や理想や新しいものを追いつづけているんですよ」

大家への道が、生やさしいものでないことを、十二分に心得ている洗君は、決して思い上がったことを言ったり、態度に出したりすることはない。しかし、たくましく、優しい彼の目は、カザルスのあとを追ひ、夢を追っている。

一方、淑さん——。この人については、1年ほど前、こんな書き出しで、新聞に文章を書いたことがある。

「岩崎淑さんの仲間は、彼女を『夢を追う女』と言う。さらに、もう少し親しい人たちは『夢を実現させてしまう女』だと言う」

その夢の一つとして、ミュージック・イン・スタイルが、ムーンビーチ・ミュージック・クラブが、スタートし、続けられ、充実した。

二人共通の夢もあれば、個別の夢もある。夢へのアプローチの仕方も、共同作業であつたり、別別であつたりする。しかし、並はずれたロマンティストであるという点で、二人は双子みたいなところがある。

ちょっと、岩崎姉弟の話から離れよう。

このレコードは、オーディオ・ファンの方たちが多く聴かれる一連のものの一枚として出される

ということを知っている。そこで、音のよさと、演奏のよさとの関係を、少し話題にしてみたい。

私は、どちらかというと、古いタイプのリスナーであり、演奏優先。モノラルLPからステレオ、デジタルと技術が進んできても、多少音が悪からうが、いい演奏のものを好んで聴き、CDが発売されるまでは、その前評判もさほど気にしなかった。ところが、いざCDが発売され、たまたま聴く機会があつたのちは、たちまちセッセとCDを聴きはじめ、音楽仲間たちを驚かせたのである。

思うに、私のCD体験は、いい演奏をいい音で聴くことで始まったのが、幸運だったと思う。そうでなければ、いまだに「音がいいだけではねえ……」などと言っていたかもしれない。

昔からヴァイオリンをはじめ弦楽器が好きだった私は、次々とそのCDを聴いており、岩崎姉弟の録音も、カセットを聴きながら、CDの音を想像し、その発売を楽しみにしている。

二人の演奏の特徴については、既に簡単に触れたが、洗君は、ストラディヴァリウスを伸びやかにタツプリとひき、名器の美しく豊かな音を十二分に鳴らしている。これがCDでどこまで再現されているかが、楽しみの一つである。また、淑さんのピアノの、デリケートでシッカリした音も、生の演奏にどこまで近い状態で聴くことができるか。

さらに楽しみなのは、ともにロマンティックな



傾向のある二人の共演の雰囲気までもが、どこまで再現できるだろうか、ということがある。

カセットを聴いた淑さんは、「九分九厘、思うようにできたと思う」と、うれしそうにしていた。洗君は、カセットを聴く間もなく、アメリカへ飛んでしまった。

二人にとって、これは多分、初のCDである。コツコツと夢へ向かって歩む洗君にとっても、夢を実現させてしまう淑さんにとっても、これはまた一つ、新しい夢の実現と言える。

最後に、このレコードの聴きどころをもう一つ――。小品集というと、軽くみる向きがあるが、これはとんでもない話。小品といっても、演奏時間が短いだけで、それぞれが異った音楽的内容をもつ凝縮された作品で、文学作品でいえば短編に当たる。こういう作品を多数ひき分けるということは、演奏者に高度の技術と豊かな音楽性を要求するのである。

だから、古今に名手は多いけれども、小品集のいいレコードは、意外なほど少ない。小品集のいいレコードを出そうとするのは、一つの挑戦だと言ってもいい。

岩崎姉弟による、こういう素晴らしいCDができる、と、聴き手の一人である私は、さらに欲が出てくる。二人によるソナタである。チェロのレパートリーは、ヴァイオリンより少ないといってもけっこう多彩な曲目がある。

次のCDには、ぜひソナタをと期待して、筆を擱くとしよう。カセットを繰り返し聴きながら過ごすうちに、戸外はすっかり雪に包まれ、岩崎姉弟の快演を吸い取るような感じになった。

富永壮彦

天上大風——チェロの魅力

ウッディ・アレンの映画「泥棒野郎」(原題: Take the Money and Run, 1969)をTVで見ていたら、主人公(アレン)が15歳の誕生日にチェロを贈られるエピソードにぶつかった。「私の知る限り最も才能のない生徒」と言われながらもレッスンに通い続け、やがては町のバレードに、プラスバンドの一員として(勿論チェロで)行進に加わるまでに上達する。バンドの制服を着けたアレンが、椅子にかけてマーチを弾き、遠ざかるバンドを(椅子とチェロを持って)追いかけて追いつき、また演奏を続けるシーンは、抱腹モノのオカシサだった。やがて彼はチェロをあきらめ、泥棒に転身していくのだが、見ながらふと、15歳のバースデー・プレゼントに一挺のチェロをもらったらどんなに良かっただろう、と思ったのだった。

ある程度の年齢と、それに見合う経験を積んで、初めて良さの解る物事、ってある。「若い頃はも一、肉さえあればってカンジだったけど、今はどっちかつと煮豆、高野豆腐、ヒジキ、それと卯の花」って具合。音楽にもこうしたことは言える。楽器でいえばさしずめチェロは、その筆頭だろう。人声に近い音域、渋い低音から輝く高音に至るまでの暖かく深い音色、どんな細かいパッセージを弾いてもけしてコセコセしないたっぷりとした豊

かさ。——こうした魅力は、ある程度音楽を聴きこんでいって初めて、感得していく種類のものだ。音楽をするに至る道は2つある。ひとつは「情操教育」として、或いは親が果し得なかった夢の代償として、親がしむけてレッスンに通わせるもの。これはピアノ、もしくはヴァイオリン、がフツですね。ほら、ヴァイオリンのケース抱えた半ズボンの小学生なんてのが、小田急線に乗ってたりする。アレです。もうひとつは、自分で選ぶケース。カッコいい→自分もなりたいたい、という単純な動機で丸井ヤング館へ出かける中学生がそれだ。楽器とはといえば、比較的魅力の解り易いギター、キーボード、ドラムス、フルートあたりが代表格だろう。

チェリストはなぜチェロを選んだのか、その過程を想像すれば、親がチェロを選び与える例はそうあるものではないだろうし、これはもう、「幸福な出会い」とでも呼ぶめぐり合わせによるものだろう。早いうちから、音楽の魅力を、かなり高いレベルで抱えている一握りの人たちが、チェロと出逢い、選びとってゆくのだらうと思うのだ。15歳の誕生日に……との想いは深い。

音楽の魅力が解る前からレッスンを始めるのではなく、魅力が解ったのちに、いいかえれば自らが目指す高みが解ったのちに、その高みに向かって音楽を学んでゆく。これは大事なことだ。今日、

練達の技巧だけが響き、さっぱり音楽の聴こえてこないピアニストが続々とデビューする中で、チェリストとはといえば、早くから自分の音楽を雄弁に持っている人が多いわけ、そんなところにあるのだろうか。

岩崎さんは日本を代表するチェリストといえる。彼もまた、早くから自分の音楽を、強い意志で表現する、本当の音楽家だった。そして今、この新録音を聴けば、ますます豊かさを増した岩崎さんの音楽が聴こえる。ピアノやヴァイオリンからは等身大の人間の歌が聴こえるのに較べ、チェロの良い演奏からは、われわれのありようより一廻り大きい歌が、生への慈しみにも似た優しさに満ちて聴こえるものだ。蒼天の高みに吹く風のように、大きな歌がここにはある。

曲目メモ

サン＝サーンス(1835-1921)：白鳥

1886に書かれた組曲「動物の謝肉祭」は、ライオンから水族館の魚、ピアニスト（これはへたくそなピアニストへの皮肉）まで登場する組曲。独奏チェロと2台のピアノに書かれた第13曲「白鳥」は、後にチェロと1台のピアノ用に編曲され、チェロ独奏曲としてオナジミのものとなった。水面をすべる白鳥か。

エルガー(1857-1934)：愛の挨拶 作品12

エルガーは近代イギリス音楽の父ともいえる作曲家。2曲の交響曲、変奏曲「謎」、チェロ協奏曲といったシリアスな名曲のほかに、行進曲「威風堂堂」やこの「愛の挨拶」など、ライトで親しみやすい小品を書いている。原曲は夫人に献げられたピアノ曲(1888)。翌年、チェロの版が作られている。

ベートーヴェン(1770-1827)：ト調のメヌエット

WoO. 10-2

「英雄」「運命」といったマジメな大作から、ベートーヴェンといえばつい、冗談も通じない厳めしい人柄を想像するけれど、その彼が……と考えればほほえましくなってしまうほどに、愛らしい小品。メヌエットは3拍子の舞曲の一種。25歳(1795)の時に書かれた管弦楽のための「6つのメヌエット」第2曲。

ドビュッシー(1862-1918)：ミンストレル

「垂麻色の髪の乙女」「沈める寺」を含むピアノ曲集「前奏曲集第1巻」(1910)全12曲の、最後を飾る曲。ミンストレルとはバリの場末のミュージック・ホールや寄席で働らく芸人・道化師たちのこと。編曲者は詳かでないが、すばやく変わるビツィカートやコル・レーニョ(弓の木梓部分で弾く)奏法が使われ、アイロニカルともいえる風変わりな味わいを生かしている。

フォーレ(1845-1924)：夢のあとに 作品7-1

これは「エレーヌ」などとは違い、歌曲として書かれたものを後に編曲した作品。R. ビュシーヌの詩は、夢に現われた佳人への憧憬を「夢の中のあの人よ、戻ってきておくれ」と歌うもの(1878)。美しい旋律は、歌詞をつけず器楽のみで演奏されても十分に表現力に満ち、やるせない想いが伝わる。

ダヴィドフ(1838-1889)：泉のほとりで 作品20-2

作曲者のカール・ダヴィドフは、ライプツィヒやベテルスブルグ(現在のレニングラード)のオーケストラで首席奏者をつとめたチェロの名手。4曲の協奏曲をはじめ、専らチェロをフィーチュアした作品も残している。この曲もそうしたひとつで、森の奥に湧き出る泉が描かれる。

藤井大史(1958-)：ゆるやかなバラフレーズ

作曲者は作曲家藤井凡大氏の子息。原曲はピアノのために書かれた。「ヴィラ＝ロボス(ブラジルの大作曲家)のメロディに触発されて作った」と自ら語るように、どこか遠くを夢みるような旋律は「ブラジル風バッハ」や「ショーロ」に聴く大きな歌ごころに一脈通ずるようだが、漂う哀調はいにしえへの想いにも似て日本人ならではの情緒に満ち、美しい創作となっている。

チャイコフスキー(1840-1893)：メロディー 作品42-3

ヴァイオリンとピアノのために書かれた「なつかしい土地の思い出」(1878)の第3曲にあたる。「土地」については、彼の精神的・経済的なスポンサーであったメック夫人の別荘、あるいは離婚の傷をいやしてひと夏を過ごしたジュネーヴ湖畔、と説が分れる。メランコリックで甘美な小品。

J.S.バッハ(1685-1750)：アダージョ

バッハがヴァイマル時代(1709?)に作ったオルガンのための作品「トッカータ、アダージョとフーガ ハ長調 BWV.564」のアダージョ部分を、ピアニストA.ジロティが編曲したもの。ヴィヴァルディの影響が感じられる作品で、アダージョ部分はさしずめ「協奏曲」の第2楽章ともいえる。弦のピツィカートをおわせる伴奏に乗って、印象的な旋律が歌われる。

J.S.バッハ：無伴奏チェロ組曲より

今日ではレコードやコンサートで耳にする機会も多い名曲だが、今世紀に入ってパブロ・カザルスが見事な演奏で復活させるまでは、殆ど忘れ去られた作品だった。6つの組曲は全てプレリュードで開始され、アルマンド、クーラント、サラバンドといった舞曲が5曲続けられる。極めて単純な書法にも拘らず、大きな精神性を持ち、チェロを

弾く人たちの原点とでもいうべき作品（1720年頃作曲）。

プレリュード（組曲第1番BWV.1007第1曲）は流れるような旋律が美しい充実した作品。**ブルー**（組曲第3番BWV.1009第5曲）はオーヴェルニュ起源の2拍子の舞曲。

ヴィヴァルディ(1678-1741)：アレグロ

ヴィヴァルディは「四季」をはじめとして多くの合奏協奏曲を作っている。この曲も、1712年に出版された曲集「調和の靈感」に含まれる第9番の協奏曲から、第1楽章を編曲したもの。本来は独奏ヴァイオリンで弾かれるメロディをチェロで演奏し、より豊かな響きを生んでいる。

フォーレ：エレジー 作品24

「レクイエム」や多くの歌曲で有名なフォーレは、一方で気品あるチェロの響きを受し、8曲のチェロのための作品を残している。「エレジー」は1880年の作。「悲歌」と訳される曲題のとうり、哀感をたたえたメロディが歌われるが、けして感傷的にならず、気高く透明なリリズムにつらぬかれ、フォーレならではの高雅な作品となっている。

スクワイヤー(1871-1963)：ブルー 作品24

ウィリアム・ヘンリー・スクワイヤーは戦前に活躍

したイギリスのチェリスト。演奏活動のかたわら、王立音楽院チェロ科の教授もつとめた。作曲家としてはマイナー・ポエトであったようで、歌曲といくつかのチェロ小品が伝わっているのみ。舞曲のリズムに乗って歌われる旋律は親しみやすいものだ。

メルデルスゾーン(1809-1847)：無言歌 二長調 作品109

メンデルスゾーンの「無言歌」といえばピアノのための曲集が有名だが、この曲はそれとは別の、純粋にチェロのために書かれた小品(1845?)。いかにも彼らしい、流れるような明るいメロディが歌われる。

ポッパー(1843-1913)：ヴィットー 作品54-5

グвид・ポッパーはオーストリアに生まれ、ウィーンの宮廷楽団でチェロを弾く一方、作曲家としても活躍した。グвидフ同様、チェリストならではの技巧を駆使したチェロ小品が伝わっている。この曲は全5曲からなる「スペイン舞曲集」の終曲。6/8拍子の早い踊り。

ファリャ(1876-1946)：火祭りの踊り

「三角帽子」と並んで名高いバレエ曲「恋は魔術師」(1915)の第8曲。編曲は、ハイフェッツ、ルービンシュタインと組んで「100万ドル・トリオ」と謳

われたチェリスト：ピアティゴルスキーによる。
悪霊払いのためジブシーが火を焚いて踊る場面に
演奏される曲で、情熱に満ちた曲調は、高い技巧
を要求されるチェロ小品となった。

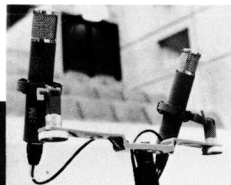
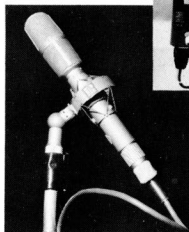
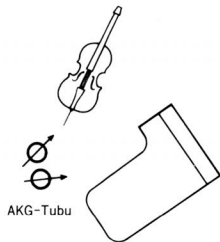
カザルス(1876-1973)：鳥の歌

チェリスト：パブロ・カザルスの演奏でなじみ深
いため、カザルスの創作と思われがちだが、カザ
ルスの生地スペイン・カタロニア地方に伝わる民
謡をチェロのために編曲したもの。本来の民謡は
「鳥たちは告げる：イエス様がお生まれだ、私たち
を罪より救い、歓びをくださるために……」と歌
われるクリスマス・キャロル。鳥の鳴き声を想わ
せるピアノのトリルに導かれ、どこか寂しげな歌
が歌われる。

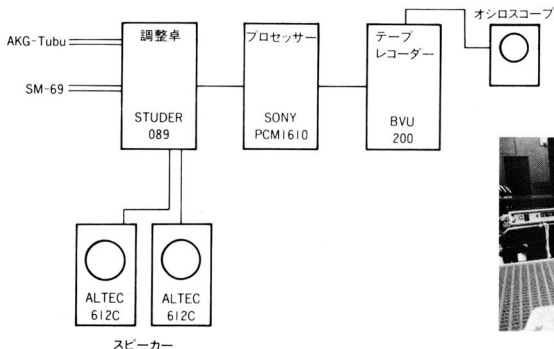
真庭 健



マイク・セッティング



録音ダイアグラム



スタッフ

プロデューサー：鈴木武昭
 ディレクター：中田基彦
 バランス・エンジニア：池田 彰
 ピアノ・チューナー：鶴田昭弘
 デザイン：東芝EMI㈱デザイン室
 カメラ：堀田正實
 録音協力：サウンド・クリエーター

録音場所：アビラック・ミュージック・
 コミュニティ・センター
 《バリオ・ホール》
 S.61. 1. 8～9

企画・制作：第一家庭電器DAM
 製 造：東芝EMI株式会社

愛蔵家No. 002457



- 1 白鳥 サン=サーンス
- 2 愛の挨拶 エルガー
- 3 ト調のメヌエット ベートーヴェン
- 4 ミンストレル ドビュッシー
- 5 夢のあとに フォーレ
- 6 泉のほとりで ダヴィッドフ
- 7 ゆるやかなバラフレーズ 藤井大史
- 8 メロディー チャイコフスキー
- 9 アダージョ バッハ

- 10 プレリュード(無伴奏組曲第1番より) バッハ
- 11 ブーレ I & II (無伴奏組曲第3番より) バッハ
- 12 アレグロ(協奏曲ニ長調より) ヴィヴァルディ
- 13 エレジー フォーレ
- 14 ブーレ スクワイヤー
- 15 無言歌 メンデルスゾーン
- 16 ヴィター ポッパー
- 17 火祭りの踊り ファリャ
- 18 鳥の歌 カザルス